

## ボナヴェントゥラの権威理論

—中世思想に見る美学の原型

横道仁志 (奈良芸術短期大学)

---

本発表では、13世紀の神学者ボナヴェントゥラ(1221-1274)の思想の中で「権威(auctoritas)」という概念がどのような役割を果たしているかという視点から、キリスト教思想と美学の接点について考察する。

中世思想史の領域では一般的に、ボナヴェントゥラは或る種の反知性主義者という評価を与えられている(Alain de Libera, (2003))。その理由は「理性は権威に従属しなければならない」という彼の発言にある。ボナヴェントゥラの発言は理性の自律性・自主性を否定しているかに見える。しかしながら、原典を確かめると、この発言は「理性が無為である場合」という限定条件を伴っている。つまり、ボナヴェントゥラは、理性を全面的に否定しているわけではない。或る特定の問題——たとえば、哲学の基礎づけの問題——に対して理性は無力である以上、合理的・論理的な方法論ではこれを処理できない。そんな状況下では、理性に代わって何が正しいかを意志選択するための原理に「権威」が要請される。それがボナヴェントゥラの主張である。この彼の権威理論は、現代で言えば、「例外事態」という概念で有名なシュミットの主権理論と、発想において共通するものがある。ボナヴェントゥラは権威という概念を通して、人間の認識活動を単純な合理性の次元でだけではなく、行為遂行性の次元でも思考しようとしている。この事実は彼の権威理論を言語論、制作論という観点から考察することを可能にする。

じっさいにも、ボナヴェントゥラの思想体系において権威は、三位一体論、キリスト論、聖書論、哲学といった多様な主題領域を相互接続するための媒介概念の役割を担わされている。その背後にあるのは、神自身の内部から神の外部へ、人間へと「言葉の伝達活動」がさまざまな次元を経由しながら反復され、伝播されていくというキリスト教的な存在＝言語論である。言葉の伝達活動は、単に言葉が理解されるだけでは未だ不十分で、この言葉が同意され、受容されるときようやく完成する。このとき、権威の言葉の受容は、「感情(affectus)」という仕方で従属者の内部に実現する。ボナヴェントゥラの神学は、感情を触発するという目的のための手段として言語活動を考察する。ここにボナヴェントゥラの神学とわたしたちの美学との接点が見出される。

以上の議論は中世の作者理論についてのアラステア・ミニスの説明とも一致している(Alastair Minnis, (1988))。ミニスによると、中世において「作者(auctor)」と認められるためには、単に著作を執筆するだけでは未だ不十分で、この著作が社会的に公認され、「模倣の価値がある」と読者から同意されなければならないのだ。ボナヴェントゥラの権威理論はこれまで、理性と信仰のどちらが優位かという文脈の中でしか語られてこなかったものの、現代の作者論にまで通じるような理論的射程を潜在させている。その一端を本発表では明らかにしたい。